



Title	<書評>「酒と健康」（高須俊明著，岩波文庫，980円）
Author(s)	重篤問題飲酒者
Citation	大阪公衆衛生. 1987, 52, p. 24-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83747
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「酒と健康」

高須俊明著（岩波文庫 980円）

著者は神経内科専攻の日本大学医学部教授であり、また自身も酒をたしなむ人である。

この本ではまず、わが国の酒類の消費の現状や酒の成分などについて説明があり、アルコールは薬品であり、薬品であるからには、人体にとって何らかの急性、慢性の薬理的影響があるはずであると説く。

次にその作用としての、急性アルコール中毒、アルコール依存症について考証がある。

この辺までは、われわれ酒飲みの間においても、アルコールのもたらす害としての認識は十分に持っている（はずである）。

しかし、著者が特にこの本の中で言いたいことは、5章以下に述べる「依存症にはなっていないが、毎日3～4合の酒を飲み続けている人に対するアルコールの害」である。

著者は、これらの人に「依存症とは無関係と思っているあなた。本当に大丈夫ですか」と問いかけているのである。

アルコールの直接作用がもたらす末梢神経脳障害（5章）、他の内臓障害や胎児への影響（6章）は、これらの飲酒者にも確実に忍びよっていることを著者は論証している。

私などは、こういう本を読んでいると「そういえば、最近手先がしびれる」とか「真っ直に歩けていないような気がする」とか、不安にかられてしまうのである。

しかしまあ、著者が最後に述べているように、酒を飲むという行為自体が人間の本性の反映というか業というものであり、酒と即かず離れずの関係を推持していくことがわれわれのとりうべき唯一の道なのだ、と私は居なおっている。

本書は今後久しく、すべてのお酒飲みが、酒と仲よくつきあっていくための指針として活用していただきたいものである。

（重篤問題飲酒者）